

第1回

令和3年度
学習院中等科入学試験

国語

時間 8:40 ~ 9:30

国
A

〔注意〕

1. 試験中は受験票を机の左上におきなさい。
2. 机の上には筆記用具（えんぴつ、シャープペンシル、消しゴム）と受験票以外は出してはいけません。
3. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
4. 始めの合図があるまでは問題を開いてはいけません。
5. 問題の内容についての質問は受け付けません。
6. 試験の終了はチャイムの鳴り始めです。
7. 用がある人は静かに手をあげなさい。
8. ページがぬけていたり、印刷が読みにくかったりした場合は先生に申し出なさい。
9. 試験が始まったら、問題のページ数をたしかめなさい。問題は1ページから13ページまでです。
10. 字数が決まっている問いについては、「、」や「。」も一字と数えます。

— 次のぼう線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① まじめにハタラク。
- ② 日本新キロクを出す。
- ③ 安心してマカせる。
- ④ すぐにユケツが必要だ。
- ⑤ ケンチク技術の発達。
- ⑥ キビしい冬。
- ⑦ 家のモケイを作る。
- ⑧ コウフンが冷めない。
- ⑨ 地域団体にカメイする。
- ⑩ 店をリンジ休業する。

高校三年生の満希（みつぎ）は、東京からやってきた野見山行人（のみやまゆきと）と小学生のころから一緒（いっしょ）にいます。

行人が医大に合格してうれしい。行人の夢が叶（かな）うのが、まるで自分のことみたいにうれしい。それはもちろん本当（ほんとう）

だけど、なんでかな。なんて言い表したらいいのかな。

こんなにあっけなく、別れの日って来るんだね。

そう思ってしまうのをゆるしてほしかった。誰（だれ）にかはわからないけど。

「……千葉の家で暮らして、東京の学校に通ってたとき、さ。」

ふと話題を換（か）えられた。顔をあげて隣（となり）を見る。

吸い寄せられるように目が合った。

かすかな緊張（きんちよう）が走って、あ、と思う。どうして緊張

なんかする必要があるんだろう。でも奇妙（きみよう）な予感に

襲（おそ）われる。

行人の表情に（１）見たことのない決意（けつぎ）があったから。

「僕（ぼく）、不登校（ふとうこう）だったんだ。」

「え？」

言われたことをとっさには理解できなかった。

行人の口からたしかに発されたその音と、わたしの知っているその意味が、一致（いっち）していないような気がした。

「不登校（ふとうこう）って……学校、行（い）ってなかったの？」

うろたえて訊（き）き返すと、ふらりと目をそらされる。

疑問符（ぎもんふ）だらけのわたしの視線を横顔（よこがほ）に受け止める行人は、しばらく迷（まよ）うような間（ま）を置いた。こくつと唾（つば）を吞（の）

（の）みくだす喉仏（のどぼとけ）の動きが見えた。

「原因（げんいん）は、いじめ。」

新聞の見出しを読みあげるみたいな、感情（かんじ）のこもらない言い方

だった。

「……っていつても、僕（ぼく）が何かされたわけじゃなくて。いじめられてたのは同じクラスの友達で、いじめてたのも同じクラスの友達

五人。」

窓（まど）に背（そむ）き向け一歩踏（ふ）み出した行人は、すぐそばのテーブル

の脇（わき）に立った。高校受験（こうこうしけん）に向けて放課後（ほうかご）ここで勉強（べんきやう）してい

たところ、いつも好（こ）んで座（すわ）っていた席（せき）だった。

「その子が話（わ）すたびに、五人（ごにん）がいつせいに笑（わら）うんだ。すぐくばか

にした感じで。笑（わら）ってやるから早く何か言（い）えて、つねにプレッ

シャーをかける。わざと聞こえるように『まだ死（し）なないな。』もう

すぐだよ。』って会話（かいわ）する。合言葉（がごころばな）みたいに、毎日（まいにち）。しかもその子

をターゲットにした理由（りゆう）なんてとくになくみえたかった。……僕は

そんな状況（じやうきやう）を黙（だま）って見てた。嫌（きら）だと思（おも）い

ながら何もしなかった。」

前（まへ）かがみになってテーブルに両手（りやうて）をつく、カーキ色のジャケット

を着（き）た背中（そで）をわたしは見（み）つめた。

手のひらで強く押（お）され続ける天板（てんぱん）が、ミシッと乾（かわ）いた音（おと）で鳴（な）った。

「だけど学年（がくねん）があがってクラス替（か）（が）えになって、雰囲気（ふんいき）（ふ

んいき）がすっかり変わったんだ。みんな新しい友達（ともだち）を見（み）つけて楽（らく

しそうだった。いじめた子（こ）も、いじめられた子（こ）も、周り（まわり）も、最初（はじ）か

ら何もなかったみたいになるまで。……気づいてたはずの先生（せんせい）た

ちも、子どもの一時的（いちじき）な気まぐれだったんだって明らかにほっと

してた。それでよかったんだよ、問題（もんだい）が自然（しぜん）に解決（かいけつ）したんだから。

でも。」

（２）力のこもる指先（さき）の爪（つめ）が白（しろ）く変わ（かわ）っていく。

「僕はひとりで、勝手に、苦しんでた。」

淡々（たんたん）と続く、いつもより早口（はやくち）なことばの連（つ）なりをわ

たしは追いかけようとした。

いっしょにいるときどき感じた、どこか心がしんとしていく感

覚（さ）に、これほど打ちのめされたことはなかった。

「誰（だれ）かを追い詰（つ）めるのも、それに飽（あ）きるのも自由（じゆう）自在（ざい）のみんなが怖（こわ）くてたまらなかったし、黙（だま）って見てた自分（おれ）だ

だって同類（どうるい）だと思った。信じられるものがなんにもなくなった。

……そしたら身体（からだ）がおかしくな（な）って。毎朝（まいあさ）胃（い）のあたりが

こわばって、重（おも）くて、なかなか起きあがれないんだ。電車（でんしゃ）通学（つうがく）だ

たから無理（無理）に駅（えき）まで行（い）こうとすると、どんどん胸（むね）が苦（くる）しくな（な）って

ホームで足（あし）が動か（動か）なくなる、昼（ひる）過ぎ（過ぎ）までそこに突（つ）っ立（た）ってた

ときもあったな。……そんなことばかりが続（つ）いて、とうとう家（いえ）から

出（で）なくな（な）った。好き（すき）で習（な）ってたピアノ（ピアノ）もやめた。」

「ピアノ。」

その単語（たんご）をつかまえる。

高校（こうこう）の合唱（がっしやう）コンクール（コンクール）が*脳裡（のうり）（のうり）によみがえったから

だ。伴奏者（ばんそうしや）（ばんそうしや）として三年（さんねん）連続（れんれき）で賞（しょう）に選ば（えら）れ、いつも

盛大（せうだい）な拍手（はくしゅ）を送（おく）られていたあのみごとな演奏（えんそう）が。首（くび）をわたしの立（た）つ側（がわ）に少（すこ）し動（うご）かした行人（ぎんじん）は、笑（わら）おうとして失（し）敗（ぱい）したような顔（かほ）で、こくんとうなずいた。

「僕（ぼく）が何も話（わ）そうとしなかったから、父（ちち）さんも母（はは）さんも困（こ）り果（は）て

てさ。『苦勞（くろう）して合格（ごうかく）した私立（しりつ）なんだし、がんばって通（と）ってみた

ら。』って言（い）われたよ。そう励（はげ）ますしかなかったんだらう

向ける。

「だからといって親に訴(うった)えたいことなんてなかった。いじめられたでも、いじめたでもないのに、くよくよしてる自分が情けなくて、腹が立って、落ちこんで。そのくり返し。」

……行人は、ここにいる。

眩(まぶ)しそうに目を細めながら、ちゃんとわたしの前にいる。

そう自分に言い聞かせなければならぬほど、(3)突然(とつぜん)に遠い隔(へだ)たりを感じた。

「登校しなくなって半年経ったころ、僕のことを聞いた長野の伯父(おじ)さんが、山村留学制度のパンフレットを送ってきてくれた。僕は東京の学校からも千葉の家からもとにかく離(はな)れて、脱出(だつしゅつ)できるなら正直行き先はどこでもよかった。ひとの数が少ない場所ならなおさら好都合で、これは最初で最後のチャンスだって思って、それで……。」

一度唇(くちびる)を引き結んだのはきつと、正しいことばを探すため。

「【 A 】んだ。ここに。」

言い終え、大きく息を吸った。

ゆっくり、ゆっくり。

まるで長いあいだ呼吸を止めていたかのように。痛みを抑(お

さ)えこむのに似た動きで、ぎゅつと胸の真ん中を握(にぎ)りしめて。

そのこぶしを、目を、唇を、わたしは黙って見つめるしかなかった。何から順に驚(おどろ)けばいいんだろう。心臓が変な速さで鼓動(こどう)を打っている。

不登校だった？ 行人が？

たしかに、そういう理由から山村留学を選んだって例はちらほら耳にしたことがある。だけどその情報を野見山行人に当てはめて考えたことはない。

だって留学してきて以来、学校を休んだ日なんか一日でもあつたつけ？ 毎年わたしといっしょに皆勤(かいきん)賞(しょう)をもらっていたはずだ。身体が弱いなんて話(わ)のはじめのころはあつた気がするけど、しよせん噂(うわさ)なんか当てにならないと思つてささと片づけてしまった。

なにせ出会ったときから行人は、よくできた生徒だったから。

同い年の子どもの目から見ても、間違(まちが)いなくそうだったから。

成績が申し分ないのはもちろん、ことばづかいも丁寧(ていねい)で、なにより人当たりがよかった。わがままな*癩癪(かんしゃく)も起こさなかったし、なんだってスムーズにこなして、褒(ほ)められたときでさえ手柄(てがら)をひけらかさない。体育

のマラソンだけは不得意だったけど、だとしても毎回ゴールまできっちり走りきってた。

どんなときもお手本だったじゃない。小さい子の面倒(めんどう)見もよくて、年上の子や先生たちからも頼りにされて、誰に対しても優しくて。

いつだって、周りにいるひとの心を察するのが上手で……。

あ。

だから。

「だから、なの？」

声にしてしまったことばは、あまりにかほそくて、相手の耳に届かなかったみたいだった。行人はこつちを見てくれない。わたしも問いかけ直せない。

だけど、きつと。

他人の考えや思いを汲(く)みとるのが上手であればあるほど、強烈(きょうれつ)なエネルギーをとまなう感情を、もろに受け止めてしまふんじゃないだろうか。

善意よりも悪意を。好きよりも嫌(きら)いを。たとえそれが自分に向けられた感情じゃなかったって、もはや関係なしに。

教室の中に尖(とが)ったことばが満ちていくのを来る日も来る日も聞き続けて、周りがそれに麻痺(まひ)し始めても感受性が鋭(するど)いまま、だんだん身動きがとれなくなつて。みんなが

そのことを忘れたようにふるまうほど、なかったことにされていくほど、どんどん身体が重くなつて。

最後は呑みこまれるしなくなる。

ぐちゃぐちゃな気持ちはことばにできる範囲(はんい)を超(こ)えていて、だから身体が悲鳴(ひめい)をあげたんだと思う。なのに他人のせいになかったんだ。責める対象は自分だったんだ。標的にされたわけじゃないのに傷ついて助けを求めるなんておかしいって、そんなの間違(まちが)つてるって思いこんでしまったから。

それで誰にも迷惑(めいわく)をかけないように、かしこく、沈黙(ちんもく)を選んだ。

——これくらい、平気にならなきゃ、だめだ。

高一の合唱コンクールが終わったあと、体育館の通用口にぼつんと座っていた姿を思い出す。クラスメイトたちに見つからないような場所で、具合が悪いのにひたすら耐(た)えるばかりだったあのとき。息をするのさえつらそうでも、絶対に涙(なみだ)をこぼさなかった。

弱い部分をしっかり押(お)しこめ、不安をコントロールする術(すべ)を身につけ、みんなに認められた優秀(ゆうしゅう)な自分を立て直すために。

これがいちばんいい方法だと、こうじゃなきゃいけないと信じながら。

戦ってた。ひとりきりで。

「……はじめて聞いたよ、そんな話。」

呆然（ぼうぜん）としてつぶやいたら、行人はようやくわたしの顔を見つめ返した。

それからふうつと、ため息をつくみたいに肩を落として、ほほえんだ。

「はじめて言ったよ、こんな話。」

笑いはまだ少しぎこちなくて、心臓の上で握りしめたままの左手はかすかに震（ふる）えている。ずっと誰にも言わずにきた秘密を明らかにしたことに、決断した当の本人のほうが動揺（どうよう）してしまっているみたい。

それじゃ、どうして。

*唐突（とうとつ）に告白の相手として選ばれたわたしは戸惑（とまど）い、どうすればいいのか途方（とほう）に暮れた。

なくさめる？ 代わりに怒（おこ）る？ 受け容（い）れる？

似たような選択肢（せんたくし）は手もとにたくさんあって、どれひとつとして B 一的じゃなかった。求められているものの形を正しくつかめなかった。

怖かった。わからないまま、とにかく怖かった。

自分の不安を後ろに隠（かく）して、わたしに気を遣（つか）ったんだ。

(5) ……はかじゃないの！

ばかだよ。ほんとどうかしてるよ。もういい子ぶってる余裕（よゆう）なんかないくせに、わたしにまで愛想よくしてどうすんの。無理しないでよ、苦しいんでしょ。何もかも捨てちゃいたかったんでしょ。ありったけの力をふり絞（しぼ）ってここに上げてきたんでしょ。

十一歳（さい）に戻（もど）って言ってやりたい。あの細い肩をつかんで揺（ゆ）さぶりたい。

もう我慢（がまん）しないで。

誰の顔色（おなほ）もうかがわないで、ぜんぶ放り投げちゃって、したいようにしてよ。本当に感じてることをわたしに教えてよ。

ねえ、野見山くん。

泣きたいんじゃないの？

眞島めいりの文章による

*脳裡（のうり） 頭の中のこと。

*癇癪（かんさく） 感情を抑えきれないで激しく怒り出すこと。

*唐突（とうとつ） 突然。

問一 波線（1）の「決意」の内容を「〜こと。」に続くように、

知らなかった事実の大きさが。ぶわつと湧（わ）き立つ感情の熱さが。

頭の奥（おく）、いやもつと遠いところから声が聞こえてくる。

あの冬、真つ白な雪の風景の中で聞いた男の子の声が。

——僕は帰らないよ。これからずっとここにいます。

——東京の私立をやめてここに来たから。再入学は難しいし、したくない。だから来年も再来年も、その先も、寮（りょう）で暮らしながら村の学校に通わせてもらう。

——どこにも行くつもりはないよ。

顔立ちも口調も大人びていた。自分に関するあらゆる物事をきちんと理解している態度だった。でも、そうじゃなかったんだ。あのとき行人はぎりぎりの状態で立っていた。もうあとがけない、しくじったら終わりだと思い詰めて。

この村に根を張らなければ、必死にしがみつかなければ、生きていられる場所がどこにもなくなってしまうって。

(4) 心の底からおびえていたのに。

——でも僕がいると、桑島さんは嫌（いや）だよ。ごめんね。

二十字以内で書きなさい。

問二 波線（2）の表現が表していることとして、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

A 満希が行人の言葉を緊張しながら待っていること。

I 満希が行人の過去の出来事に怒りを覚え始めていること。

U 行人が次の言葉を必死に語ろうとしたこと。

E 行人が話をしながらどんどん寒さを感じていること。

問三 波線（3）のように満希が感じたのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

A ずっといっしょにいて、何でも知っているとと思っていた行人の知らない過去を明らかにされたから。

I 行人と知り合う以前の話なので、二人で重ねてきた時間の長さを改めて実感したから。

U 東京に行人がいたころの話で、今いる場所から遠く離れた場所での出来事だったから。

E 過去の出来事と向き合う行人が大人に思えて、そのようなことをしない自分はずかしく思ったから。

問四 一 A 一 に入る言葉を文章中から五字で探して、書きなさい。

問五 一 B 一 に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 客観 イ 協力
ウ 好意 エ 決定

問六 波線(4)の後に言葉を補うとすると、どのような言葉が適切ですか。「行人は」に続くように一行で考えて書きなさい。
問七 波線(5)の時、満希は行人のどのような所を「ばかじやないの!」と感じたのですか。六十字以上八十字以内で書きなさい。

問八 この物語を「満希が物語。」という一文でまとめなさい。ただし「」に入る言葉は三十字以上四十字以内とします。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

皆(みな)さんは、雑草を育てたことがありますか?

雑草なら庭にいくらでも生えている……と思うかもしれませんが、そうではありません。実際に、種を播(ま)いて、水をやって、育てるのです。

雑草は勝手に生えてくるものであって、雑草を育てるなんておかしいですね。

私は雑草の研究をしています。そのため、研究材料として雑草を育てることがあります。

雑草は放っておけば育つから、雑草を育てるのは簡単だ、と思うかもしれませんが、ところが、それは大間違(ちが)いです。雑草を育てるのは、じつはなかなか難しいのです。

雑草を育てることが難しい理由は、私たちの(1)思うようにならないからです。

何しろ、種を播いても芽が出てきません。

野菜や花の種であれば、種を播いて水をやり、何日か待っていれば芽が出てきます。ところが、雑草は違います。種を播いて水をやっても、いくら待っても芽が出てこないことがあるのです。

野菜や花の種は、人間が発芽に適していると考えた時期をあらかじめ想定して、改良されています。そのため、野菜や花の種は人間

のいうとおりに芽が出るのです。一方、雑草は芽を出す時期は自分で決めます。人間のいうとおりには、ならないのです。

また、野菜や花の種であれば、一斉(いっせい)に芽を出してきます。ところが、雑草は芽が出たとしても時期がバラバラです。早く芽を出すものがあるかと思えば、遅(おく)れて芽を出すものもあります。忘れた頃(ころ)に芽を出してくるものもあれば、それでも芽を出さずに眠(ねむ)り続けているものもあります。やっと芽を出しても、足並みが揃(そろ)っていません。

早く芽を出すせつかちもいれば、なかなか芽を出さないのんびり屋もいます。このバラバラな性格は、人間の世界では「個性」と呼ばれるものかもしれません。

雑草はとても「個性」が豊かです。そういえば、聞こえはいいですが、結局バラバラで扱(あつか)いにくい存在です。そして、個性ある雑草たちは育てにくい存在でもあるのです。

それにしても、どうして、雑草は芽を出す時期がバラバラなのでしょう。

植物にとっては、早く芽を出したほうが成長するためには有利な気もするのに、(2)どうして雑草には、ゆつくりと芽を出すような性格のものがあるのでしょうか?

皆さんは、「オナモミ」という雑草を知っていますか。

トゲトゲした実が服にくつつくので「くつつき虫」という別名もあります。子どものころに、実を投げ合って遊んだ人もいられるかもしれません。

オナモミの実を知っている人も、この実の中を見たことのある人は少ないのではないのでしょうか。

オナモミの実の中には、やや長い種子とやや短い種子の二つの種子が入っています。

二つの種子のうち、長い種子はすぐに芽を出すせつち屋さんです。一方の短い種子は、なかなか芽を出さないのんびり屋さんです。

オナモミの実は、性格の異なる二つの種子を持っているのです。

それでは、このせつち屋の種子とのんびり屋の種子は、どちらがより優れているのでしょうか。

そんなこと、わかりません。

早く芽を出したほうが良いのか、遅く芽を出したほうが良いのかは、場合によって変わります。

「【 A 】」というとおり、早く芽を出したほうが良い場合もあります。しかし、すぐに芽を出しても、そのときの環境（かんきょう）がオナモミの生育に適しているとは限りません。

「【 B 】」というとおり、遅く芽を出したほうが良い場合もあります。だから、オナモミは性格の異なる二つの種子を用意

しているのです。

雑草の種子の中に早く芽を出すものがあつたり、なかなか芽を出さないものがあつたりするのも、同じ理由です。

早いほうがよいのか、遅いほうがよいのか、【 C 】オナモミにとっては、どちらもあることが大切なのです。

芽を出すことが早かつたり遅かつたりすることは、雑草にとっては、優劣（ゆうれつ）ではありません。雑草にとって、それは個性なのです。

しかし、早く芽を出すものがあつたり、遅く芽を出すものがあつたりすると、いろいろと不都合もありそうです。芽を出す時期は揃っているほうが良いような気がします。

バラバラな個性って本当に必要なのでしょうか？

バラバラな性質のことを「遺伝的多様性」といいます。

個性とは「遺伝的多様性」のことです。多様性とは「バラバラ」なことです。

しかし、どうしてバラバラであることが良いのでしょうか。

皆さんは、学校で答えのある問題を解いています。問題には正解があり、それ以外は間違いです。

ところが自然界には、答えのないことのほうが多いのです。

たとえば、先に紹介（しょうかい）したオナモミに代表されるよ

それを知っているからオナモミは、二つの種子を持っているのです。

しかし、不思議なことがあります。

先に書いたように、自然界では【 D 】が大切にされます。それなのに、タンポポの花はどれもほとんど黄色です。

紫（むらさき）色や赤い色をしたタンポポを見かけることはありません。タンポポの花の色に個性はありません。これはどうしてなのでしょう。

タンポポは、主にアブの仲間を呼び寄せて花粉を運んでもらいます。アブの仲間は黄色い花に来やすい性質があります。そのため、タンポポの花の色は黄色がベストなのです。

黄色が一番いいと決まっているから、タンポポはどれも黄色なのです。

しかし、タンポポの株の大きさはバラバラです。大きなタンポポもあれば小さなタンポポもあります。葉っぱの形もさまざまです。ギザギザに深く切れ込（こ）んだ葉っぱのものもあれば、切れ込みのない葉っぱのものもあります。

どんな大きさが良いかは環境によって変わります。葉っぱの形も、それが良いという正解はありません。

そのため、タンポポの大きさや葉っぱの形は個性的なのです。

個性は当たり前のようにあるわけではありません。個性は生物が生き残るために作り出した戦略です。個性があるということ、つまりはなぜバラバラであるかといえ、そこに意味があるからなのです。

人間はどうでしょうか。

目の数はどうですか？

目の数は誰（だれ）もが二つです。これは人間にとって目の数は二つがベストだからです。同じように鼻の数にも、鼻の穴の数にも個性はありません。おそらく人間にとって鼻は一つ、鼻の穴は二つが一番良いのです。

目の数や鼻の数には個性はありません。

動物の目の数が二つなのは当たり前ではないかと思うかもしれませんが、そうではありません。たとえば、多くの昆虫（こんちゅう）は二つの複眼の他に、三つの単眼という目があります。つまり、目が五つあるのです。

はるか昔の古生代の海には、目が五つの生き物や、一つ目の生き物も存在していました。しかし今、私たち人間の目の数は二つです。それは、目の数は二つがもっとも合理的で「目の数に個性はいらない」というのが進化の結論だったからなのです。

しかし、私たちの顔はみんな違います。誰一人として同じ顔はあ

りません。垂れ目の人もいます。つり目の人もいます。目の大きな人もいます。目の小さな人もいます。もし、人間にとってベストな顔があるのであれば、誰もがその顔をしているはずですが、いろいろな顔があるということは、どの顔が良いとか悪いとかではなく、いろいろな顔があることに価値があるのです。

性格も一人ひとり違います。得意なことも人それぞれ違います。生物は必要のない個性を持ちません。私たちの性格や特徴（とくちょう）に個性があるということは、その個性が人間にとって必要だからです。

稲垣栄洋の文章による

問一 波線(1)の「思うようにいかない」ことの内容として当てはまらないものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 種を播いてもすぐに芽が出ないこと。

イ 芽を出すのがおそいのんびり屋がいること。

ウ 芽を出す時期を雑草が決めていないこと。

エ 芽が出る時期がそろっていないこと。

問二 波線(2)の問いに対する答えを一行で書きなさい。

問三 【 A 】【 B 】に入る言葉として、最も

も適当なものを次からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

ア 枯(か)れ木も山のにぎわい

イ 急(せ)いては事をし損じる

ウ 立て板に水

エ 言わぬが花

オ 馬の耳に念仏

カ 善は急げ

問四 【 C 】に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 比べることに何の意味もありません。

イ 競争することにこそ意義があります。

ウ 結果はもちろん、早いほうです。

エ この正解は一つであるべきです。

問五 波線(3)といえる理由を三十字以上四十字以内で書きなさい。

問六 【 D 】に入る言葉を文章中から三字で探して、書きなさい。

問七 この文章の説明として当てはまらないものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 筆者の主張を分かりやすくするために、様々な具体例を用いて説明している。

イ 植物に関する事実を書き、そこから考えられることを人間にも当てはめている。

⑨	⑤	①
⑩	⑥	く
	⑦	②
⑧	しい	③
	せる	④

問一	
問二	
問三	
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	

行人は

満希が

物語。

問一	
問二	A
問三	B
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	

受験番号